

FADO

10

Abril 1996

月田秀子ファド倶楽部

TSUQUIDA HIDEKO FADO CLUBE JORNAL

①

月田秀子の昨日、今日、明日…

開け放った窓から、甘い沈丁花の花の香りとともに町の喧騒が飛び込んでくる。夕陽が丘という地名に惹かれたこともあって、当地天王寺区に引っ越して初めての春である。以前住んでいたアパートは、高速道路と幹線道路である松屋町筋にはさまれ、窓を開ければたちまち道路の真ん中に居るような騒音に苛まれる。春風どころか、排気ガスで気分まで煤けてくる始末。離れてみると7年近くもよく住んでいたものだと思う。

当地は夕陽が丘中学、高校、五条小学校、上宮高校、警察病院、通信病院と、まこと静かな文教地区にあたりこうして窓を開け、幽かな町の喧騒に身を浸し、夕暮時など子供の「お母ちゃん」と呼ぶ声に、幼かった頃を思い出し、妙に胸が熱くなったりする。そんな適度な喧騒が今の私には心地よい。

3月20日、待ちに待ったCDが出来てきた。一刻も早く予約をもらっている人達に発送したい。会員の中西夫妻、杉本さん、濱道さんが急遽駆け付けてくれた。我が家は納期におわれた家内制手工業の場と化し、すさまじい勢いで作業が進む。5時間後には段ボール6個150通分の封書の山ができた。翌日には早速、到着の電話をもらったりで、一件落着。

ご予約下さった皆様、永らくお待ちいたしました。お手伝いいただいた方々、ありがとう。。

翌日、法善寺の「ルル」へ10枚持参。タンノイのスピーカーから流れるポルトガルギターの音が心地良い。

「ポルトガルギターが何とも凄いな。リスボンで録音したの？一人で行って？」興奮した面持ちで繰り返すマスターの顔がギタリストの顔と重なり、いつのまにか私は、平屋建て、白く塗られた壁に小さな丸い窓が並ぶリスボンの録音スタジオにタイムスリップしていた。スタジオというより避暑地によくあるコテージ風なたたずまい、内部は木の壁。顔にあたる部分だけガラスのはまった木の衝立ての向こう、ギタリストが「その調子その調子」と言うように目で合図を送ってくれる。彼はスペインからのコンサートを終え、半日車を飛ばして帰ってきたところだ。そんな彼に支えられて、録音は進んだ。私はいつしか自分が何度もここで歌ったことのあるようなというより、見えない何者かに導かれているような思いがした。たくさんのファド唄いの魂が私を見守っているような、そんな気さえしてきた。

私は思い出す。日の落ちたサグレスの岬の断崖。吹き上げる潮風。海に沈む落日を待ち続けたギンショの浜。飽く事無く繰り返す波。一つとして同じ崩れ方はない。その波の塩辛さは、ポルトガルという国を底辺で支えた人達の、そして、奴隷として祖国から連れてこられたアフリカの民の汗と涙…。

リスボン滞在予定は正味5日間。ましてその間に祭日と日曜がある。正直言って録音は無理だと思った。しかし、10年来のポルトガルでの一番の友人ゴウヴェイア夫人は「秀子、何のためにはるばる日本から来たの？録音のためでしょ。じゃ、そうしようよ。」と言って、全てをさしおいて、ギタリストとの交渉の後押しをしてくれた。帰国の前々日の深夜、録音の手筈が調った。東洋の果ての一人の名もない女が寄せるファドへの想いが起こした二度目の奇跡だった。一度目の奇跡については、またいつかの機会に。

そんなこんなの様々な思いの絡み合った末にできたアルバムです。ぜひ、一度聴いてください。 月田秀子

NEW ALBUM CD

「ファド・メノール」(JJ-020)

定価2,800円

(お申し込み先)

■東京・渋谷「ディスク・ジャン・ジャン」

TEL 03-3461-6818

■「月田秀子ファド倶楽部」

郵便振替 00990-6-18440

送料400円を添えてお申し込みください。



(CDを置いて下さっているレコード店)

■大阪・アメリカ村「ガーデン」 06-211-3771

(CDを置いて下さっているお店)

■大阪・心斎橋「アートクラブ」 06-253-0827

■大阪・法善寺「ルル」 06-211-1759

■大阪・大正「喫茶アルマ」 06-554-3833

■京都「巴里野郎」 075-361-3535

「サウダーデ」と「わび・数寄」

神戸市立博物館内にある南蛮美術館に修道士に囲まれた老茶人を描いた南蛮屏風がある。狩野派の絵師、狩野内膳の作と伝えられている。右手に十字杖、左手にロザリオを持つ、この絵の老茶人は、千利休ではないか？という事である。「千利休キリシタン説」は以前からもあった。言うまでもなく千利休は「わび茶」の完成者である。「わび茶」の芸術の様式は、華美壯麗を排した隠遁的孤独的である。キリスト教祭儀と茶の湯との関連については、以前から数多く指摘されていることであるが、茶の湯はポルトガル人滞日の16世紀頃大流行であった。「わび茶」と「サウダーデ」とは、その発生、その成立、その哲学は異なるが、「わび茶」の成立に「サウダーデ」が、何らかの影響を与えたのではないかと思うのである。

「サウダーデ」の語源は、ラテン語のsolitare(Ⅱ)「孤独」である。「サウダーデ」とは、「自分が愛情、情愛、愛着を抱いていた人、あるいは事物(抽象的なものも含む)が、自分から遠く離れ、近くにいない、またはない時、あるいは自分がかつて、愛情、情愛、愛着を抱いていた人、あるいは事物が、永久に失われ完全に過去のものとなっている時、そうした人や事物を心に思い描いた折りに心に浮かぶ、切ない、淋しい、苦い、悲しい、甘い、懐かしい、快い、心楽しいなどの形容詞をはじめ、これらに類するすべての形容詞によって同時に修飾することのできる感情、心の動きを意味する語である」と解されている。本来、淋しい、悲しい等の感情、そしてその反対の快い、楽しい等の感情はポルトガル人だけでなく、世界すべての人達の持っている感情である。そして現実の世界では「悲痛」と「喜悦」という相反する感情を同時に持つことはできない。現在より過去に戻って、心に思い描くことによって同時に持つことが可能である。そしてその現在の環境は、近くにない、失われた、人、事物(愛情、愛着をもっていた)との関連において「孤独」である。であるから「サウダーデ」とは、ポルトガル人の単なるメンタリティでなく、「悲痛」と「喜悦」という相反する感情を同時に混じり合って多儀的に形容した、ポルトガル特有の哲学的概念であると思う。

一方、日本の「わび・数寄」であるが、その語源と美意識の成立には文化史的な変遷が名詞化したもので、元来は不満、不足を感じ、心細く思い煩う事であって、その感情が生じるのは、孤独だけではない。貧乏もある。失恋、別離もあって、「わび」の感情も多儀的である。「数寄」とは「好き」であって快い、心楽しい感情である。「好き」とは男女の色恋から生まれ、漢字も「女子」である。しかもこの「好き」は単なる色恋好きでもない。

「実らぬ恋」「失われた恋」の淋しさ、無念さという「わび」の感情に対しての「好き」である。やがて「好き」は色恋と離れて、音曲の世界、風流の世界と移り、「好き」が「数寄」となる。元来「好き」とおもしろい煩う「わびしい」感情とは別の感情で、相対立する感情であって、現実の世界では同時に持つことはできない。雲間で見え隠れする、中秋の名月は「わびしい」が、脳裏に美しい満月をイメージすることによって「わび・数寄」となる。「サウダーデ」の、こうありたいと願う渾身の憧れと共通している。

歌の世界では、それがファドであれ、シャンソンであれ、ジャズであれ、そして日本の演歌であれ、その詩やメロディは「もの悲しく」「わびしい」ものが多い。「失恋」・「別離」・「孤独」・「すれちがい」等、たとえハッピーエンドでも、その過程に「悲哀」もある。心の葛藤もある。歌は本来「悲哀」と「喜悦」が混じり合い、同居しており、ファドの場合、その歌詞の多くは「ファドやギターを媒体として、不幸であることの楽しみ、哀感を表現することの楽しみを、憂めそやしているのだ」。人達はその「もの悲しい」歌を聴き、歌うことによって、結構楽しんでいるのだ。

年をとると、社会からも家族からも疎外され、また「別離」もある。年齢は確実に「孤独への道」を歩みつつある。人達は「孤独な老人」に「サウダーデ」を残してゆき、「孤独な老人」もまた人達に「サウダーデ」を残してゆくものである。現実の孤独は「わびしく」きびしいが、その現実の孤独から「サウダーデ」や「わび・数寄」の世界に身を置くと、案外、心楽しいものである。一人ぼっちの部屋で、「飯」・「茶」・「酒」兼用の粗末な茶碗に、「わび茶」ならず、「わび酒」をつぎこんで、「サウダーデ」の境地に身を置いて、「ファド」を聴きながら飲んでいると、これぞ！「ファド」と「わび酒」の醍醐味であると、つくづく感じるわけである。

(H・T生)

「Fadista」というカクテル。



それは、ファド唄い女と名付けられたルビーポートワインをベースにした、ほろ苦くて甘く、冷たくて暖かいカクテル。
大阪駅の近くガード下のBAR「ARTEMIS」のパーテナー・バ木氏のオリジナルである。

ficção

読切連載

秀子のエピソード帖

[その7]

秀子と、或るギタリストの出会い

内間 天馬

1987年夏、本格的にファドとポルトガル語の勉強をすべく、秀子は二度目のリスボンに降り立った。ファドとの出会いに運命を感じた1980年、なかば衝動的に日本を飛び出した時と違い、じっくり1年は勉強するつもりだが、大学には通うものの、肝心のファドの学校などないどころか勉強の方法すらわからない彼女にとって、無為に日々が過ぎ去るのは、落ち込む以外に為すすべがない。

ところが、彼地にも神はいたのですな。がむしゃらにファドに取り組むその情熱を本物だとポルトガルの神様が感じたのか、年が明けてTV出演の話が舞い込む。ま、日本人がファドを歌う事に話題性があったのかな。ただし、伴奏者は自分で用意する事。勿論、ギャラなど払えない彼女、つてを頼って探した結果、「僕にさせてくれ」という男が現れる。空き瓶回収の仕事しながら家族を養い、貧しくもギターの勉強に励んでいた彼は、もちろん無名。秀子も無名。ファド歌手など一人とていない日本でファドに魅せられてしまった秀子。将来に青写真などあろう筈がない。天命に打たれた如く日本を後にした彼女にとって、ファドの本場でのTV出演は千載一遇の

チャンス。ありったけの魂を振り絞り、精一杯歌う秀子に、ギターの彼も懸命のサポート。唄い終え、上手に唄えたかどうか戸惑う秀子の肩に彼はそっと手を置き、「ヒデコ、僕は君と共演できた事を誇りに思う」。

ところがこのTV出演が大成功。翌日の新聞は『ハイク(俳句)ファド』のタイトルで一面トップで秀子の特集。週刊誌などで彼女は時の人になるどころか、あのファドの女王、ポルトガルの国民的歌手アマリア・ロドリゲスに「秀子は第二のアマリア」と言わしめ、ポルトガル大統領を始め大いなる知遇を得る。ギターの彼はと言えば、その後、精進が認められ、1990年、遂にアマリアの伴奏者に抜擢され一流奏者の仲間入りを果たす。

さて、去る12月のサンケイホールでのリサイタルをご覧になった方、覚えておられますか？ポルトガルギターの第一人者、カルロス・ゴンサルヴェス氏と秀子さんの脇で、暖かいまざしとともに歯切れのいい的確なリズムを刻む彼の姿を。あれこそ秀子さんとの出会いから8年後のレロ・ノゲイラその人なのです。リスボンの片隅でレロさんも彼女も将来日本で共演するなんて想像も出来なかったんじゃないかな。出会ってほんまに素敵ですよ。ところで皆さん、秀子さんには内緒ですが、レロさんは彼女と同年生まれ。けど、けど彼にはもうお孫さんが・・・。

次回の当コラム、『食いしん坊秀子の好物は、意外や意外・・・』お楽しみに！

cartas

●月田さんの日頃のライブには、仕事の都合でなかなか行くことができず心苦しいのですが、「ファド倶楽部ジャーナル」はいつも興味深く拝読しています。

投稿というのは気が臆するのですが、前号に掲載された大阪のO・Y之氏のお便りの内容に関して、心に引っかかるものがあり、氏への反論を含めて少々申し述べたい気持ちになりました。もっとも私自身さほどファド音楽に造詣が或る訳でもありませんし、まして本紙面の場を白けさせるような発言になるのは本意ではありません。でもたくさんの便りの中からO氏のあの長文を載せられたのは、読者のそれなりの反応を予測しての事ではないかと、勝手に推測して書かせてもらいます。

率直に言いますが、O氏は月田さんのステージに何やら粹な演歌歌手の様なノリを期待されていませんか。

「真面目すぎて気が抜けない」「舞台と客席の一体感がない」「しゃべりがたどたどしい」というご見解もそうですが、「スクリーンに訳詞やらポルトガルの港町の風景を映す」などにいたっては、もうまるで最近の演歌のカラオケビデオの世界ですよ。少なくとも私は月田さんのステージに、息抜きや上手なトークや、それこそ安っぽいビジュアル演出など欲しくありません。「入場料金

上げて仕掛けや演出に金かけて」どうなるのでしょうか。そもそも上手に虚飾をあしらえば、もっとファンが増えるような音楽なのでしょう。

12月のコンサートには、ファド初体験の友人を一人誘って行きましたが、終了後に、友人は自分が知らないすばらしい音楽があったことと、こんなにも実直で優しいコンサートをする人がいるとうことに痛く感激していました。私もあらためて、凛とした歌と演奏のもつ力を認識しました。そうした経験から言わせてもらおうと、O氏の「初めての客には馴染み難い」という考え方は、ちょっと如何なものかと思いますが…。

とにかく月田さんのやり方やファドという音楽を、マイナーだからどうか、メジャーになればどうかと言うのは、しょせん傍観者の独善でしかありませんよ。その点私などもっと下世話なところで、裏ファンクラブ的に、あるいはレジスタンス風に『月田秀子を取りあえず食べるファド歌手として天寿を全うさせる方法を模索するファンの集い』でも企てたい思いがあるのですが、これはこれできつく批判されそうだな・・・。

(奈良 K・Y輝)

informação

●会長の黒田清氏の対談集「元気の出る本」（定価 1,300円）が芸術生活社から出版されました。大村崑さん、島倉千代子さん等人生の大先輩に混じって、月田秀子が登場します。

●6月28、30日のバナナホールでの『きまぐれライブ』では、月田秀子の好きな歌をファドのジャンルを越えて聴かせてくれるそうです。入手した極秘情報によると、ゴスペルソング、ビートルズのナンバーなんかも入っているらしい。まずファド倶楽部の会員の皆様からのお申し込みを優先的に受け付けます。会場にはバーがあり、グラスを傾けながら聴く月田秀子の歌は、また格別。行かなきゃ損、損。ひとりでも多くの方のお申し込みをお待ちしています。同封の郵便振替用紙にてお申し込み下さい。締切りは、6月15日（土）です。

月田秀子のスケジュール

- 4月15日（月） 兵庫／尼崎『麒麟亭コンサート』
6:30開演 お問合せ ☎06-499-3521（キリン）
- 20日（土） 東京／六本木「ミステリオ」 ☎03-3586-6518
7:00開場 お問合せ ☎030-96-22811（丸）
- 21日（日） 静岡／沼津「チュチュルリエ」 ☎0559-51-7384
- 22日（月） 大阪／心斎橋「アートクラブ」 ☎06-253-0827
①8:00～3回ステージ
- 26日（金） 京都／四条河原町「巴里野郎」 ☎075-361-3535
①8:00 ②9:00 ③10:00
- 5月 6日（月） 大阪／堺「ジャルダン」 ☎0722-21-2907
会費7,000円（7ルコ・スフィナー）
6:00開演 *要予約 ☎0722-21-2907
- 12日（日） 神戸／新開地『アコースティック・エッセイ』
7-ドレックスター オープンイベント ☎078-512-5353
7:00開演 *チラシ参照
- 17日（金） 山口／「県政史料館ホール」
6:30開演 お問合せ ☎0839-25-6202（組）
- 18日（土） 山口／徳山「BAR」 ☎0834-31-9308
- 27日（月） 大阪／心斎橋「アートクラブ」 ☎06-253-0827
①8:00～3回ステージ
- 31日（金） 京都／四条河原町「巴里野郎」 ☎075-361-3535
①8:00 ②9:00 ③10:00
- 6月21日（金） 京都／四条河原町「巴里野郎」 ☎075-361-3535
①8:00 ②9:00 ③10:00
- 24日（月） 大阪／心斎橋「アートクラブ」 ☎06-253-0827
①8:00～3回ステージ
- 28日（金） 大阪／堂山町「バナナホール」 ☎06-361-6821
『きまぐれライブ PART<I>』*ライブ録
ファド・フォルクローレ・ラテン編
6:00開場/7:00開演
- 30日（日） 『きまぐれライブ PART<II>』
ファド・シャンソン・ポピュラー編
4:00開場/5:00開演
チケット/前売 5,000円
当日券 5,500円
28・30日通し券(前売) 9,000円
お問合せ ☎06-345-5062(サンイック)

ファド倶楽部の皆様へ

月田秀子ファド倶楽部が結成されてから、早いものでもう2年半が経ちました。当初は月田さんの友人関係や、古くからのファンの方々を中心に構成されていたこの倶楽部も、今年の3月現在、大阪・京都を中心に、なんと380名を越えるという大所帯となりました。それまでは社会的な知名度が低かったファドを、10年間にわたり地道に歌い続けてきた月田さんの努力も然ることながら、やはり歌を愛する多くの人々の熱意が倶楽部をここまで大きくしたのだと思います。

ただここで、組織が大きくなったことを喜んでばかりはいられない問題も出てきたのです。それは、倶楽部の運営に関する問題なのです。今のファド倶楽部で役職の有る方は、黒田会長さんと会計の井本さんだけで、それ以外は月田さんと友人の方々によって運営されてきました。当初は顔を見知った人々が多数を占めていたもので、運営に関しては然程問題とはならなかったのですが、ここまです人数が増えてきますと倶楽部に対してその思惑も各人それぞれに違ってくるのも当たり前です。月田秀子の美貌に惚れて入会した人、その歌声の素晴らしさにひかれて入会した人、またファドが大好きでこの会に入った人と動機は様々だと思いますが、倶楽部の充実と発展を望まない会員の方はいないと思います。しかし、月田さん一人の力だけでは今までの仕事で手一杯で、これから先の倶楽部の運営や様々な企画などを考えている暇がなかなかありません。また、月田さん自身も新しい歌の練習や新しいジャンルの開拓など、いろいろ忙しくしておられます。そこで、月田さんにあまり負担をかけずに、これから先の倶楽部の運営をどのようにしていけば良いのかを考えるために、高野山の中野密杖氏が呼びかけ人となり、登・井本・播本・西村の4人が組織作りの準備の為のお手伝いを仰せ付けられました。

我々はあくまでも新しい役員が決まるまでの中継ぎ役でしかありません。月田さんと共々一日も早く倶楽部の組織作りを行い、新しい執行部にバトンタッチをしたいと考えておりますので、ファド倶楽部の会員の皆様方のご理解とご協力の程宜しくお願い申し上げます。

西村 友孝

■編集後記 6月のバナナホールでのライブコンサートを控えて、忙しい毎日の月田さん。ファドジャーナルを製作している横では、新しい試みのライブに向けてのリハーサルが着々と進んでいる。2日に分かれたライブスタイルは、私たちが想像する以上に楽しいものになるだろう。

■月田秀子ファド倶楽部ジャーナル第10号
■1996年4月1日発行（季刊：年4回発行）
■編集・発行 「月田秀子ファド倶楽部」事務局
■〒543 大阪市天王寺区小宮町1-22, 5-F
■TEL&FAX 06-779-4597